仏蹟ボロブドゥール

石井和子

一　はじめに

世界遺産の一つボロブドゥールは中部ジャワのヨクヤカルタ（通称ジョクジャ）市西北約四三キロ、東にムラピ、ムルバブ、西北にスンビン、スンドロといった山々に囲まれたクドゥ盆地の中に人工的につくられた丘にそびえたつ仏教遺跡である。

この寺院の建立の由来や寄進者の名を記す記録など全く残っておらず、建立年代は不明であるが、回廊の浮き彫りのパネルに残された文字から判断して、八世紀の後半からその建造がはじまり九世紀の中頃には完成したものとみられている。しかし、その後ボロブドゥールはムラピ山の噴火で土中に埋まり、人々の眼に触れることなくジャングルの中で眠っていた。その永い眠りから覚めたのは一八一四年、当時ジャワを統治していた英国の総督トーマス・スタンフォード・ラッフルスにより発見・発掘された時のことであった。一八一七年のラッフルスの『ジャワ史』の発刊以後、古代ジャワの遺跡に関する調査・研究は、英国にかわりその後再びジャワを支配したオランダの手により急速に進み、二〇世紀にはN.J. Krom、J.L. Moens、W.F. Stutterheim、J.D. de Casparisといった著名な学者により、その意味するもの、浮き彫り、パンテオンなど様々な角度から様々な議論がなされてきた。

ボロブドゥールがラッフルスによる発見・発掘から二度にわたり世紀を越えようとしている今、改めてボロブドゥールに関する筆者の考えを明らかにしたい。

二　ジャワへの仏教の伝播

中国僧法顕は三九九年陸路を経てインドを訪れ、一五年滞在した。帰路は南海を経由したが、途中暴風雨にあい耶婆提国に漂着したといわれる。法顕はその著書『仏国記』のなかで、「乃到一国、名耶婆提、其国外道婆羅門興盛、仏法不足言」と記している。この耶婆提はヒンドゥー王国であった西ジャワのタルマ王国であるとされている。同じ頃中国の資料にでてくるのは闍婆国である。カシミール出身といわれる僧グナヴァルマン（求那跋摩）が闍婆国において仏教を広め、国王は彼のために精舎を建立したと伝えているが、この闍婆がジャワであるか、スマトラであるかいまだに決着をみていない。このグナヴァルマンが布教したのは根本説一切有部系のもの、いわゆる小乗仏教であった。

六七一年中国僧義浄はインドへ向かう途中、スマトラ島のシュリーヴィジャヤに立ち寄り、六か月梵語や仏典を学んだ。その著書『南海寄帰内法伝』によれば、南海地方は「多是小乗末羅遊少有大乗」、マラユを除く多くの国が小乗仏教を信奉して

いたことがわかる。この「マラユ国」はこの時代にシュリーヴィジャヤの支配下におかれている。

それでは、同時代のジャワはどのようであったであろうか。義浄の『大唐西域求法高僧伝』によれば、訶陵（ジャワ）には高僧若那跋陀羅（ジュニャーナバドラ）がおり、中国僧がこの僧の協力で小乗仏教の経典の漢訳を行ったという。しかし、ジャワにおいてはこの僧に関する記録は残っていない。密教経典の一つである『金剛頂経』を中国に伝えたインド僧金剛智は、七一八年インドから中国へ向かう途中シュリーヴィジャヤに五か月滞在した。この間スマトラのみならずジャワを訪れていた可能性が高い。というのも『貞元新定釈教目録』に不空三蔵が七一八年に闍婆国で金剛智とめぐりあい弟子になったと記しているからである。しかしこの時代、訶陵国があったとみられている中部ジャワでは、七三二年のチャンガル碑文からもわかるように、シヴァ教が盛んであった。大乗仏教に関する記述はすでにボロブドゥール寺院の建造が始まっていたであろう七七八年のカラサン碑文がその最初である。カラサン碑文で注目したいのは、梵文の表記にそれまでの南インド伝来のパラヴァ文字とは異なる、当時ベンガルやネパール等で用いられていた前ナーガリー文字（悉曇文字）が使用されていることである。この碑文は「シャイレーンドラ王家の顧問達が女尊多羅をまつる寺院の建立を時の王であるパナンカラン王に進言し、その聖所と大乗の戒律をまもる修行僧のための僧院がカーラサの地に建立された」ことを伝えている。多羅は古代ジャワの密教教理書『サン・ヒアン・カマハーヤーニカン（聖大乗論）』にも記述がある女尊であるが、インド・チベット密教では特に重要な地位をしめていた。八世紀のチベット僧ブッダグフヤは『大日経広釈』の中で「波羅蜜の門」と「真言の門」の二種の行を説いている。弘法大師空海はこれを「顕教」と「密教」と名付けているが、カラサン碑文中の大乗は、後の『サン・ヒアン・カマハーヤーナン・マントラナヤ』にいう「真言道大乗」であり、インドからの新しい流れは大乗の真言道、すなわち「密教」だったのである。

三　ボロブドゥールの意味するもの

ボロブドゥールの名の由来は定かではない。ボロブドゥール(Barabudhur)の「bårå」とはbiara精舎・寺院、「budhur」はジャワ語で「丘」を意味するとの記述をみかける。確かにボロブドゥールは丘の上にそびえたつ寺院[注1]ではあるが、ジャワ語の「budhur」には「丘」という意味はない。カスパリスは八四二年の通称マグラン碑文の「kamūlān i bhūmi sambhāra」をもとに、「bhūdhara」の語をこれに加え「bhūmi sambhāra bhūdhara（地の資糧を集めた山）」とし、これが省略・転訛し「Barabudhur」になったとみている。また彼は「地の資糧」を大乗仏教における菩薩が仏陀になるために行う一〇段階の修行とみなし、ボロブドゥールが方形六段、円形三段、それに中心塔を加えると一〇段となることから碑文中の「kamūlān（祠堂）」をボロブドゥールに比定している。一四世紀マジャパイト時代の宮廷年代記『ナーガラクルターガマ』には執金剛派の聖所の一つに「Budhur」の名があがっているが、執金剛派とは密教の一派である。筆者はボロブドゥールを密教聖所と考えているのでこれに注目している。

前述のようにボロブドゥールはその下部が方形の六段から、

上部は円形の三段からなっており、中心塔までいれると全部で一〇段となる（図1参照）。地下に埋もれていた基壇と下部の各段の回廊には仏典の浮き彫りがほどこされている。地下の隠れた基壇には『分別善悪応報経（*Mahākarmavibhaṅga*）』の教えのいくつかが浮き彫りとなっており、第一段の回廊は仏伝記『方広大荘厳経（*Lalitavistara*）』、『本生譚（*Jātaka*）』、『譬喩譚（*Avadāna*）』、第二段の回廊には『本生譚』、『譬喩譚』と『華厳経』入法界品（*Gandavyūha*）、第三段、第四段の回廊も入法界品が続き、『普賢行願讃（*Bhadracarī*）』で終わっている。これらの仏典の構成は隠れた基壇の『分別善悪応報経』に示される倫理以前の世界から、「譬喩譚」の倫理的世界、「本生譚」「仏伝記」の初期仏教（小乗仏教）、そして「入法界品」の大乗仏教への思想的展開を表すものと言えよう。ボロブドゥールが「仏教の百科辞典」ともいわれる所以である。

ボロブドゥール寺院の建築の意味するものについては種々の説がある。『華厳経』では、菩薩の修行が進むに従って心の向上する過程を一〇の段階に分けて説いているが、ボロブドゥール寺院が中心塔までいれると一〇段となるところからこの寺院全体がその菩薩修行の一〇段階を表しているとみる説や、仏教三界説もある。これについては後述する。

『華厳経』の菩薩修行の一〇段階説、すなわち十地思想であるが、ジャワにおいてこれが広まっていたか不明である。古代ジャワの密教教理書『サン・ヒアン・カマハーヤーカン（聖大乗論）』に実践すべきと説かれていたのは、布施、戒、精進、禅定、智慧の六波羅蜜に四無量心、すなわち慈、悲、喜、捨の四つを加えた十波羅蜜であった。

一方、ボロブドゥールには五〇四体の仏像が幾何学的に整然と配置されているところから立体曼荼羅ともいわれている。方形の基壇から第三回廊までは東西南北それぞれ印相の異なったもの、第四回廊には四方向同一のもの、計四三二体、さらに円壇の格子の透しの入った釣り鐘型のストゥーパには七二体の仏像が安置されている。これら六種の仏像の印相は次の通りである。

東側の九二体　触地印。南側の九二体　与願印。
西側の九二体　禅定印。北側の九二体　施無畏印。
四方向の六四体　説法(ヴィタルカ)印。
円壇の七二体　転法輪印。

『初会金剛頂経』では金剛界曼荼羅の五仏の印相について次のように記している。梵文は堀内本[堀内　1983]による。また数字は梵本のパラグラフを示す。

(285)…bodhâgrī nāma mudrêyam buddhabodhipradāyikā// (286) Akṣobhyasya tu bhūsparśa Ratne tu varadā tathā/ amitāyoh samādhyagrā Amoghasyâbhayapradā//

この部分は不空の漢訳では、「此印名覺勝　能與佛菩提　不動佛觸地　宝生施願印　無量壽勝定　不空施無畏」となっている[大正蔵　18:221]。これに基づけば方壇の四仏はそれぞれの印相から東側－不動（梵文では阿閦）、南側－宝生、西側－無量寿（＝阿弥陀）、北側－不空成就である。ボロブドゥールの四仏は『初会金剛頂経』の記述と一致する。残りの一仏、毘盧遮那の印相は覚勝（智拳）印であるが、これはボロブドゥールのものとは異なる。この第五仏については後述する。次ぎに円壇の七二体

であるが、これに関してはこれまで色々意見が述べられてきた。クロムは金剛薩埵説である。金剛薩埵はネパールなどでは、「五仏の師」と考えられ「第六の仏」と呼ばれている。「第六の仏」ということで金剛薩埵に比定したと思われる。岩本裕は古代ジャワの『聖大乗論』の神学をもとに釈迦牟尼説をとっているが、[註2]そのパンテオンは筆者のもの（図2）とは異なる。一番重要な部分である宇宙の根本原理「ディワルーパ（光り輝くもの）」とそれが人格化された「ブッダ」がぬけている。ローケシュ・チャンドラは毘盧遮那仏、干潟龍章は大日如来の自受用法身としている。しかし、ジャワにおいては自受用法身、他受用法身などに相応する用語は存在しない。

ボロブドゥールの仏像構成を考察するにあたり筆者が関心をもったのは密教経典『初会金剛頂経』であった。

四　ボロブドゥールと『初会金剛頂経』

密教経典『初会金剛頂経』は七世紀末にインドにおいて成立したといわれる。不空三蔵著の『金剛頂経瑜伽十八会指帰』に依れば、『金剛頂経』は十八会あり、その「初会」にあたるのが七五三年不空によって漢訳された『金剛頂一切如来真実摂大乗現証大教王経』、いわゆる『初会金剛頂経』である。この経典は一〇一五年には施護によりあらたに漢訳されている。不空訳のものは施護訳の金剛界品、大曼拏羅広大儀軌分第一に相当する。

筆者が注目したのは『初会金剛頂経』の「別序」と「金剛界如来の会座」である。

「別序」は次のように述べている。数字は堀内本のパラグラフを示す。

(7)さて尊きマハーヴァイローチャナ（大毘盧遮那＝大いなる輝くもの）は一切虚空界に常住したる身・語・心金剛であり、(8)一切如来と互いに関連しあっているので、金剛のように揺るぎないあらゆる領域を、完全に理解する智慧をそなえた存在であり、虚空界すべてにみちている微塵のごとき金剛のように、揺るぎない加護力によって生じる智慧の母胎である。…（中略）……空間のすべてに広がりゆきわたって…(13)ウマー女神の夫シヴァ神……ヴィシュヌ神…三世間…三界……(14)ブラフマー神…涅槃…仏陀…(15)智慧、波羅蜜道…一切如来…毘盧遮那であり、…(17)尊きもの（大毘盧遮那）は、大菩提心であり、普賢であり、大菩提薩埵であり一切如来たちの心に住していた（頼富 1988）を参考・引用）。

「マハーヴァイローチャナ（大毘盧遮那）」の「ヴァイローチャナ」は「輝くもの」を意味し「毘盧遮那（ビルシャナ）」は音訳である。筆者は『初会金剛頂経』において「マハーヴァイローチャナ（大いなる輝くもの）」と表象されるものは、虚空界に遍満し、あらゆる事象を包括する宇宙の根本原理、根源的な実在であるとみている。経典は「マハーヴァイローチャナ」は一切如来たちの心に住していた」といっている。この一節を具象化したのが、ボロブドゥールの七二基のストゥーパとその中に安置されている転法輪印の如来像であると考える。宇宙の根本原理「マハーヴァイローチャナ」はボロブドゥールの円壇上に一切如来となって顕現しているのである。不空の漢訳では「マハーヴァイローチャナ（大毘盧遮那）」は「大毘盧遮那如来」となっており、梵文にはない「如来」の語が加えられている。「如

来」とは仏のことであり、真如（＝普遍的真理）からきて、真理の体現者として衆生を導くといわれる。「マハーヴァイローチャナ」は宇宙の根本原理の表象であり、「如来」や「仏」ではないという解釈がジャワにあったことは、後述の『サン・ヒアン・カマーヤーニカン（聖大乗論）』の記述から推察できる。

経典ではこのあと一切如来たちは菩提坐に坐っていた、釈尊を暗示している一切義成就菩薩のもとに赴く。そして一切如来たちはこの菩薩に対し、「あなたは一切如来の真実を熟知すること無く、あらゆる苦行に努めているが、どのようにして無上正等覚菩提を体得しようとしているのか」と問う。一切義成就菩薩は一切如来たちによってその心が啓発されアースパナカという三摩地から起きて、一切如来の真実を得る方法を尋ねる。ここで一切如来により、(1)通達菩提心　(2)修菩提心　(3)修金剛心　(4)証金剛身　(5)仏身円満の五段階からなる五相成身観が説かれる。第四段階で一切義成就菩薩は灌頂され、金剛界という灌頂名をもらい、金剛界如来となる。

続いて一切如来たちは、宇宙の中心にそびえ立つ聖なる山、須弥山（メール山）の頂にある金剛摩尼宝峯楼閣へと向かう。

(32)そこに移動し終わって、（一切如来たちは）金剛界如来を、一切如来たちとして加護をなし、一切如来の獅子座に、あらゆる方向（四方）にお顔が向くように坐らせた。(33)さて、その時、阿閦如来と、宝生如来と観自在王（＝阿弥陀）如来と、不空成就如来は、一切如来として、みずから自身に加護をなし、世尊釈迦牟尼（金剛界）如来が、あらゆる存在の等しさを正しく理解していることによって、（阿閦などの如来たちも）すべての方向は平等であると認識して、四方に坐されたのである[頼富1988]。

この部分から明らかなことは、一切如来たちが集まった須弥山頂の金剛摩尼宝楼閣で、金剛界如来は四方に顔を向けて、阿閦如来など四如来は四方それぞれの方向に坐ったことである。ボロブドゥールの仏像構成が一―三段目までが東西南北それぞれ印相の異なったものが安置され、四段目では四方向すべて同じ印相のものとなっているのは、ボロブドゥールのプランナーがこの記述に依拠したものと筆者は考えている。

またこの一節から金剛界如来は釈迦牟尼如来とも呼ばれていることがわかる。しかし、ここでは、毘盧遮那如来の名はない。金剛界如来が毘盧遮那如来である事は、次の十六大菩薩出生の段で知ることできる。毘盧遮那如来＝金剛界如来＝釈迦牟尼如来なのである。　先に見たように『初会金剛頂経』では毘盧遮那の印相は智拳印であるが、この毘盧遮那にあたるボロブドゥールの第五仏（如来）の印相はヴィタルカ（説法）印である。釈尊は成道後、鹿野苑において五人の比丘たちに最初の説法をした。初転法輪である。図像上ではこの時の釈尊は転法輪の印相をとるものがあるが、ボロブドゥールの仏伝図の浮き彫りでは転法輪印ではなく、ヴィタルカ印である。また仏伝図中、転法輪の釈尊は描かれていない。ボロブドゥールのプランナーは毘盧遮那＝釈迦であり、また『初会金剛頂経』では、毘盧遮那・釈迦は「マハーヴァイローチャナ（大いなる輝くもの）」の顕現体である一切如来に教化される立場にあった、言い換えれば「法」を説いたのは一切如来であったと理解したので、転法輪の印相を用いず、ヴィタルカ印にしたと筆者は考えている。

ジャワには『初会金剛頂経』そのもののテキストは残っていない。しかし、金剛界曼荼羅の修法の手引きとして用いられたと思われる写本などは現存している。また『初会金剛頂経』系の経典や諸尊の造像の規則に基づいて作成されたと思われる青銅製の尊像が数多く出土している。その中にはわが国では大日如来として親しまれている智拳印の毘盧遮那如来も多く含まれる。

ボロブドゥールの仏像構成はこれまで金剛界曼荼羅図をもとに考察がなされてきた。しかし、『初会金剛頂経』の記述との関連は論じられることはなかった。ボロブドゥールの仏像構成は『初会金剛頂経』の「別序」と「金剛界如来の会座」の具象化であるというのが筆者の見解である。

五　ボロブドゥールにみる仏教の「三界」とシヴァ教の「三相」

先にふれたようにボロブドゥールに関する諸説の中に仏教の「三界」、つまり欲界、色界、無色界を具象化したものという説がある。欲界は地下の隠れた基壇に見られる欲望に満ちた世界であり、第一段から六段までは色界、つまり欲望は断ったが肉体の存するものの世界、そして肉体も持たず精神的要素のみになる無色界は、円壇と中心塔である。[註3] 筆者は三界説を受け入れるが、ボロブドゥールにおけるこの区分には異を唱えるものである。問題点は無色界である。これまでの説では円壇と中心塔は無色界とされてきた。しかし、円壇上の七二基の小ストゥーパにはそれぞれ一体ずつ如来像が安置されており、格子の隙間からのぞき込まないとその姿がよく見えない。つまり、円壇は「肉体ももたず精神的要素のみ」の無色界ではなく、「欲望は断ったが肉体の存する」色界の具象化である。そして、欲界はこれまでの説の隠れた基壇だけでなく方壇全体となる。

更に、ボロブドゥールの中心塔、円壇と方壇の仏像構成と造形は後のシヴァ教の教義にもみられる「無相」「有相・無相」「有相」の「三相」を表していると考えられる。[註4] これは宇宙の根本原理、根源的実在が人格化され顕現し、それがさらに現象界に姿を顕すというものである。ボロブドゥールの中心塔は宇宙の根本原理で「無相」、円壇上の尊像はそれが人格化されたもので「有相・無相」であり、衆生には未顕現の存在である。そして方壇の五如来が現象界に姿を顕している「有相」である。

ボロブドゥールにおける仏像構成は、一〇世紀の『サン・ヒアン・カマハーヤーニカン（聖大乗論）』に説かれるジャワ密教のパンテオンとも密接な関係を持つ。『サン・ヒアン・カマハーヤーニカン（聖大乗論）』（以下*SHK*と略す）は古代ジャワの密教教理書であり、『サン・ヒアン・カマハーヤーナン・マントラナヤ（聖真言道大乗）』（以下*SHKM*と略す）とともに一九一〇年オランダの J. Kats により蘭訳ではじめて世界に紹介された。*SHKM*は梵文の偈を古代ジャワ語に釈すというかたちをとっているが、この梵文偈が日本を含め世界の仏教学者の注目を集めたのは、この偈の一部が漢訳、チベット語訳のみで、未だに梵文テキストが見付かっていない『大日経』の断片だったからである。『大日経』は前述の『初会金剛頂経』と並んで日本の真言宗の根本経典でもある。

図2は*SHK*の記述をもとにしたジャワ密教のパンテオンである。*SHK*において「ディワルーパ（光り輝くもの）」と表象されるものは宇宙の根本原理・根源的実在であると筆者は考えている。これは前述の『初会金剛頂経』の「マハーヴァイローチャ

ナ（大いなる輝くもの）」にあたるといえよう。*SHK*が『初会金剛頂経』系の経典と関係があることは、この書の中に「王による免税地の寄進は聖なる金剛界スブティ・タントラ（の教義）を敬うゆえであった」と記されていることからもうかがえる。この「ディワルーパ（光り輝くもの）」が人格化されたものが「バターラ・ヒアン・ブッダ（仏陀尊）」である。この両者の関係について筆者は、W.F. Stutterheimとは意見を異にする。彼は「古代ジャワのシステムでは最高尊格は仏陀尊であり、それが光り輝くものと釈迦牟尼の姿をとる」としている。また、J. Katsも*SHK*中の一文を「聖なるディワルーパは実に仏陀尊の化身である」と訳しているが、果たしてそうであろうか。原文に従えば、宇宙の根本原理「ディワルーパ（光り輝くもの）」は「ブッダ」の本体となっている、言い換えれば「ブッダ」となって顕現しているのである。[註5] 根本原理・根源的実在は、古代ジャワで受容された『初会金剛頂経』系の仏教においては「ブッダ」ではなかったのである。*SHK*によれば、別の一派は根本原理を「最高空」としている。

図2からわかるように*SHK*では、釈迦牟尼・金剛手・世自在（＝観音）を「三宝尊」、毘盧遮那・阿閦・宝生・阿弥陀・不空成就の五仏を「五如来尊」と呼んでいる。この三宝尊と五如来尊の存在は二つの異なる曼荼羅の系統があったことを示唆しているが、ジャワでは「ブッダ」のもとに一つに統合されている。現存する遺跡のうちこの「三宝尊」と関係があると思われるのが、ボロブドゥール近くのムンドゥット寺院である。ムンドゥットはボロブドゥールより少し年代が古く八世紀の半ばから後半あたりのものとされている。堂内には、約三メートルの高さの如来像と観音そして金剛手菩薩とみられる三尊が現存している。

ボロブドゥールの中心塔は*SHK*の「ディワルーパ（光り輝くもの）」、円壇の尊像が「バターラ・ヒアン・ブッダ（仏陀尊）」、そして方壇の五如来は「五如来尊」に相応すると筆者は考えている。

六　おわりに

八世紀半ばシャイレーンドラ家はそれまで中部ジャワの内陸部を支配していたヒンドゥー教信奉のサンジャヤ家を退け政権を握ることになった。シャイレーンドラ家はその政治統合と支配権の確立のためにヒンドゥー教の神々よりも強力な「呪力」をもつ、新たな「カミ」を導入する必要があった。それがブッダやヒンドゥー教の三神も統べ、あらゆる事象を包括する宇宙の根本原理・根源的実在「マハーヴァイローチャナ（大いなる輝くもの）」だったと考えられるのである。

ジャワにおいては一三世紀以降、宇宙の根本原理に対し「シューニヤ（空）」「カシューニヤタン（空性）」「ダルマ（法）」「スークスマ（微細なるもの）」といった語が使用されている。シンガサリ朝のクルタナガラ王（位一二六八―一二九二）はその著書とされる『ラージャパティグンダラ』の中で「シューニヤ（空）」を宇宙秩序の頂点に位置付けていた。

一四世紀には仏教の五如来とシヴァ教の五神が同定され、両宗教の共存が構築された。図3はその共存関係を示すものである。

一四世紀のタントゥラル作『スタソーマ』には次のような有名な一節がある。

最勝なるブッダとシヴァは異なるものと人はいう、
その違い、いかにして見分けられようぞ、
ブッダの本質、シヴァの本質はひとつなり、
二面のダルマのなきがゆえに。

この一節から「ブッダ」も「シヴァ」も「ダルマ（法）」、即ち一なる宇宙の根本原理・根源的実在を本質とするとみなされていたことがわかる。仏教徒の主尊「ブッダ」、シヴァ教徒の主神「シヴァ」はともに根本原理が人格化されたものである。シヴァ教の教理書『ジュニャーナシッダーンタ』には、シヴァ教が説く根本原理・根源的実在「パラマシヴァ（至高のシヴァ）」はカシューニヤタン（空性）であるとの記述がある。シヴァ教、仏教がそれぞれたてる根本原理の同定である。両教の共存は「法」や「空」や「空性」が根本原理・根源的実在として両者に了解されたことにより可能となったといえるであろう。(註6)

スマトラに遅れること約一世紀、ジャワでは一五世紀末頃から北海岸地方を中心に徐々にイスラーム化が進行する。一六世紀のものといわれる『セ・バリの教訓書』では神と人間の同一視を認めない中世イスラーム最高の思想家ガザーリーの教説が強調され、「根源的な無・空がアッラーの本質、礼拝する主の本体である」という異端思想家の教説が否定されている。

その後イスラームは沿岸部から内陸部へ伝播して行くが、その過程で積極的に受け入れられたのはイブン・アラビーの「存在一性論」系の思想であり、一七世紀のインドの神秘家ムハンマド・ファディラーが著した「七段階顕現説」であった。「存在一性論」では人格神アッラーは、根源的な一者ではなく、その顕現にすぎない。

前述の異端思想家の教説は「存在一性論」の流れをくむものと思われるが、ヒンドゥー・仏教期のジャワにおいて主流となっていた思想と相通じるものがあることは興味深いと言えよう。

註

(1)ジャワ語の「budhur」は椰子の蕾の液汁を意味し、丘という意味はない。西スマトラのミナンカバウ語を語源とするインドネシア語「budur」には出っ張った、突き出たという意味があり、かつてボロブドゥールと結び付けられることもあったが、現在では受け入れられていない。

(2)岩本　1973:189を参照。

(3)この三界の区分は「千原　1982:138」参照。

(4)シヴァ教のパンテオンでは「無相」はパラマシヴァ、「有相・無相」がサダーシヴァ、そして「有相」がブラフマー、ヴィシュヌ、マヘーシュヴァラ、マハーデーヴァ、ルードラの五神である。マヘーシュヴァラは神話や図像に描かれる「有相」のシヴァ神である。

(5)訳に問題があるのは、原文の「pinakāwak」を正しく解釈していないからだと思われる。「pinaka～」は「～とされる」を意味し、「～となっている」とも訳される。「awak」は身体・本体を意味する。「pinakāwak」は「～によって本体とされる」もしくは「～の本体となっている」と解すべきであった。

(6)宗教哲学者ジョン・ヒックは著書の『宗教の哲学』の第九章四節「宗教多元主義のための哲学的枠組」の中で次のように述べている。

「したがって、世界の偉大な伝統宗教は、無限の同一の神的実在に対するさまざまに異なる覚知と対応をあらわしているのだとすることが、一つの可能な、また確かに魅力のある仮説―全面的な懐疑論にかわる代案―なのである。」

二〇世紀のジョン・ヒックの言を待たずして、このような枠組みはすでに古代ジャワにおいて構築されていたのである。

図1　ボロブドゥール平面図

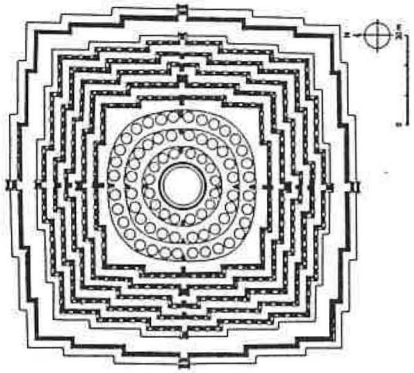


図2　『聖大乗論』の記述をもとにしたジャワ密教のパンテオン

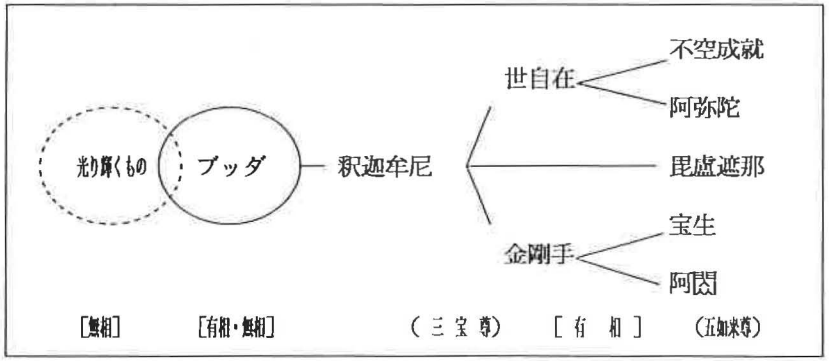
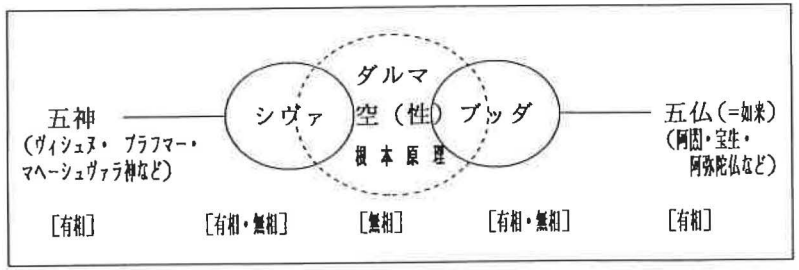


図3　シヴァ教と仏教の共存関係



引用・参考文献

外国語文献

de Casparis,J.D. 1981. The Dual Nature of Barabuḍur, in *Barabuḍur, history and significance of a Buddhist monument.* Berkeley: Center for South and Southeast Asian Studies, University of California.

HaryatiSoebadio.1971. *Jñānasiddhānta.* The Hague: Martinus Nijhoff.

Kats,J. 1910. *Sang Hyang Kamahayanikan.* 's-Gragenhage:Martinus Nijhoff.

Soewito Santoso. 1975. *Sutasoma: A Study in Javanese Wajrayana.* New Delhi: International Academy of Indian Culture.

日本語文献

千原大五郎 1982 『東南アジアのヒンドゥー・仏教建築』 鹿島出版会

ヒック J.H. 1994 『宗教の哲学』 間瀬啓允・稲垣久和訳　勁草書房

堀内寛仁 1983 『梵漢蔵対照初会金剛頂経の研究』梵本校訂篇（上）高野山大学教文化研究所

石井和子 1988 「古ジャワ『サン・ヒアン・カマハーヤーニカン（聖大乗論）』全訳」『伊東定典先生・渋沢元則先生古希記念論集』東京外国語大学インドネシア・マレーシア語学科研究室

岩本裕 1973 「インドネシアの仏教」『アジア仏教史　インド篇VI 東南アジアの仏教　岩本裕（編）　佼成出版社

頼富本宏 1988 『大乗仏典』＜中国・日本篇＞8　中央公論社